

めいいか

令和4年10月31日
文京区立明化幼稚園

読み聞かせの楽しさを

園長 野田久美子

木々の葉が色付き始め、2学期も折り返し点となりました。年中組保育室からは、「いもいもくりくり…♪」と、「たべもの列車」を歌う声が聞こえます。屋上では、年長組が植えたサツマイモが土の中で大きく実り、収穫の日を待っています。食欲の秋、お米や果物が実り、様々なおいしいものを味わえますね。

先日の運動会では、保護者の皆様の温かい応援を受け、子どもたち一人一人が力を発揮することができました。ご協力に感謝いたします。運動会後も曲に合わせて体操やリズム表現をしたり、他学年の演技をまねたりして遊ぶ姿が見られます。スポーツの秋、子どもたちが運動遊びを通して体を動かす楽しさや心地よさを味わえるようにしていきます。

さて、幼児期は体の育ちと同様に心の育ちが大切なのはいうまでもありません。心を育てる一つの方法として、本との出会いがあります。幼稚園では、ほぼ毎日読み聞かせをしています。子どもたちは読み聞かせをする人の声の心地よさを感じたり、登場人物の心情を想像したり、日常とは異なるお話の世界を楽しんだりしています。感じ方は一人一人違います。担任は読み終わりに余韻をもたせ、それぞれが感じていることを大切にしています。後日、読み聞かせを通して興味をもった絵本を繰り返し見たり、「一緒に見よう」と友達と共有したり、時には遊びで再現したりすることもあります。

先日、玉川大学教授 大豆生田 啓友 先生のお話を伺いました。「保育の質向上のためのマネジメント」がテーマの講演でしたが、その中に絵本に関する興味深い内容がありました。学生に「ぐりとぐら」の絵本を知っているか聞いたところ全員が知っていた、加えて「ぐりとぐら」にまつわる思い出があるか尋ねたところ、それぞれから様々なエピソードが出てきたそうです。父の膝の上で何度も読み聞かせをしてもらった、幼稚園や保育園で先生に読んでもらって大好きな絵本になった、「ぐりとぐら」をまねて母と一緒にカステラを作った（今思えばホットケーキだった）などです。普段は忘れていたエピソードが心の中に積み込まれていて、それがこのような機会に思い出される、幼児期のこのような豊かな経験の積み重ねがその後の人格形成に大きく影響する、「保育の質は、子どもが得られる経験の豊かさと、それを支える保育の実践や人的・物的な環境など、多層的で多彩な要素により成り立つ」という内容で、幼児期に豊かな経験をすることの大切さを再認識しました。

読書の秋、ご家庭でも秋の夜長に読み聞かせを通して、お子さんと絵本の世界をお楽しみください。大好きな人に絵本を読んでもらう豊かな時間はお子さんの心の栄養になることでしょう。



収穫前のサツマイモ